

オーブン カレッジ

経営学を学ぶ意味

私の勤務する岡山女学園大学では、今年度より、働く女性のためのキャリアアップコース（30〜40代の女性ビジネスリーダーを対象にするマネジメント講座）を開講している。日本や愛知を代表とするような蒼々（そうそう）たる企業の十数名が参加しているのだが、すでにそれぞれの分野において立派な実績を持つメンバーと議論する中で再確認した、経営学を学ぶ根本的な意味を述べたい。

そもそも経営学は、企業の経営活動を対象に企業行

る。では、経営学を学ぶと、醸成される。日々の仕事やどのような良いことがあるのだろうか。経営者にとつての経営戦略論、人事部メンバーにとつての労務管理論や、営業メンバーにとつてのマーケティング論などは、技術的な意味があることはすぐに思い浮かぶ。しかし、経営学を学ぶことの意味は、特定の専門分野の技術的な知識の獲得だけではない。

経営学を学ぶことの大切さの第一は、仕事に意味を見出すことができることである。経営学は、自分の立場を超えた高い視点を与えてくれる。担当事業を超えた、全社的なレベルでの戦略や組織を見る目を持つことで、自分が置かれた立場

醸成される。日々の仕事や経験の積み重ねは、一方で多くの知識を学習することにつながるが、他方で決まりきった常識的なものごとに見方や考え方を固定化させてしまう。どんな人も実は、自分なりの眼鏡をかけて、世の中やものごとを見ているのである。経営学を学ぶことは、理論的に構築された、客観的なものごとの見方をするための眼鏡を手に入れることと言える。

正しい現実把握 主体性の醸成

動の原理やマネジメントのメカニズムの解明と、より良い経営活動を導き出すための社会科学の一分野である



岡山女学園大学
現代マネジメント学部教授
佐々木 圭吾

や仕事の意味を俯瞰（ふか）ん）できるようになる。さらに一歩進んで、世界や日本や地域社会における、産業や企業の機能を知ること、自分の仕事の意味、つまり、自分が仕事を通して世界と結びついているという感覚を醸成してくれる。

第二は、世の中の現実（リアリティー）を正しく捉えることができるということだ。働く集団や組織では、既成観念や偏見が必然的に醸成される。日々の仕事や経験の積み重ねは、一方で多くの知識を学習することにつながるが、他方で決まりきった常識的なものごとに見方や考え方を固定化させてしまう。どんな人も実は、自分なりの眼鏡をかけて、世の中やものごとを見ているのである。経営学を学ぶことは、理論的に構築された、客観的なものごとの見方をするための眼鏡を手に入れることと言える。

佐々木 圭吾 経営組織論、ナレッジマネジメント論。一橋大学大学院商学研究所博士後期課程満期退学・博士（経営学）

イノベーション時代において企業は、自己変革力をもたなければならない。そのためには、すでにプロフェッショナルとして活躍する人材も、企業、そしてマネジメントの本質的な特徴を理解し、激変する現実を正しく捉え、仕事や働くことの意味を自分なりにつくり出すなければならない。